

漁家の漁師から1959年公立学校の英語教師へ転職。35年間教職につき、定年退職後、中国光州外国語学院東語系日語日文学科講師、韓国釜山市東義大学校外国語研究院客員教授を務める。

## 「妻を愛す」

あの8月15日の朝、妻は階段下の床に倒れていた。壁にもたれて。隣に寝ていた妻の様子が変わったと思いつつも、私はさきに起きて、台所にいたのだが、フト気配を感じて妻を見たときの驚きと、声にならなかった私の叫び。いま思い返しても胸ふさがるので。

結婚してもう47年、妻は健康で、働き者で、気が強くて、すばらしいハウスキーパーだったのだ。一緒になったとき、私は無一文であった。10円もポケットになかった。長い浪人の末、免許を生かして英語教員になったばかりだった。

「どうしてお金も何も無いのに、私と結婚したのよ」

口喧嘩のとき、妻がよく口にする言葉だ。

「私の姉なんか、結婚する前に、腕時計とかテーブルとかステキな椅子など、買ってもらったって、よく話していたのよ」

この妻の言葉は私を強く刺激する。私は怒りをおさえる。ときには、つかみ合いの喧嘩も幾たびか。そのたびに私は反省し、私のした事実をたしかめて、少しうなだれ、2階の私の部屋に逃げるのだった。

私は祖父母の家で育てられ、あの戦争が終わった翌年の、旧制中学校に入学した日から父の家に移った。母は私を生み落としてすぐ父と結婚したのだ、私を残して。私は小山羊の乳で育った。しかし妻がよく言うように、母性愛を求めて妻と一緒にになったのではない。頼り甲斐のある、しっかりした妻が好きだったのだ。それに、私の性欲が、妻を離すのを拒んだのだ。私は26歳だっ

た。妻のからだは欲しかったのだ。私は人間くさかったのである。

35年間の勤務中、サラリーは袋のまま妻に渡した。土曜日も日曜日もなく私は働いた。定年退職後、かねての念願だった日本語教師になって、中国光州、韓国釜山にそれぞれ1年ずつ単身赴任して、定年後の夫婦の危機を乗り切ったと私は信じたし、帰国後は外国旅行を6回、口喧嘩はときどきやっていたが。2人は90何歳まで、ともに生き、私がさきにあの世に行くはずだった。それなのに北国の束の間の夏の暑さのまっ盛りの朝、妻は突然倒れて、救急病院に運ばれたのである。

長い間、書くのを止めていた私の、『私の妻』という詩を載せて、私はますます妻を愛す。

### 『私の妻』

「君の奥さんがどうしてこんな恐ろしい病気にとりつかれたのか」と人に問われたら私は答えよう。

「長い結婚生活の間にたまりにたまったストレスだね。全責任は私にある。」

「その責任をこれから果たそう。」私はしんしにそう思っている。妻はいま私との長かった人生のストレスから解放されて、何もかも忘れてホッとしてこの小さなベッドに横たわっている。

ゆっくり目を閉じて。

動かせる方の左手の指はタオルのはしをつかんで好きだった縫い物のしぐさをしきりにしながら。

ときどき目をひらいて私をみつめ、自分がどこにいるのかも、どうしてここにいるのかも知らぬげに、大きなあくびをしたりして。両の目尻にうっすらと涙をにじませて。

ああ、私は妻にやさしくなろう。

こんどこそ。